

浄土

monthly JODO

2017 November

11

法然上人鑽仰会

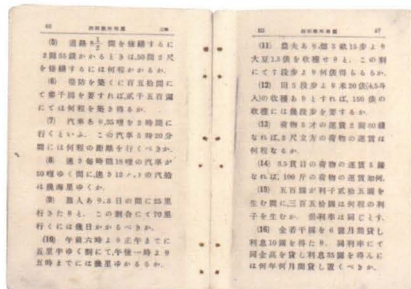
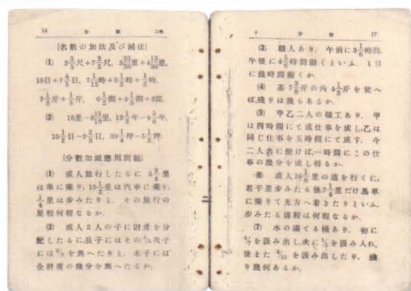
貧乏骨董

連載⑦

高等小學 算術書

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



一九〇五（明治三八）年に発行された「高等小學算術書 第二學年兒童用」である。この手の古い教科書は骨董市ではよく見かける。値段も一冊三百円から五百円と安い。これを買ったのは、二年はど前、東京・深川の富岡八幡宮の骨董市だった。

「文部省著作」とあるから、国定教科書である。発売所は「株式會社國定教科書共同販賣所」と表記されている。奥付を見ると「發行所有斐閣書房」とある。有斐閣といえ、現在でも社会科学や人文書を出版している老舗出版社である。

内容は分数を中心とした



天地184ミリ、左右124ミリ。表紙は厚紙で並製。本文82ページ。左は奥付

もので、大きく「分数」「歩合算」「四則應用問題」の三つの項目に分かれている。まず「分数」を学ぶにあたって「倍数、公倍数」の説明から始まる。そして「約数、公約数」「分数の意義及び書き方」「分数の簡易なる計算」というふうに進んでいく。

高等小學校の第二學年は、〇七（明治四〇）年の小學校令の一部改正までは十一歳ということになる（改正後は尋常小學校六年生）。戦後生まれのわたしが分数を学んだのは何歳のころだったろうか。記憶が曖昧である。現在では小学二年生あたりから、初歩的な分数を学ぶらしい。小学二年生といえ七、八歳である。

「四則應用問題」には次のような問題が出されている。「甲乙2人の職工あり、甲は7日の間、乙は12日の間働き、賃金合計15円20銭を得たり。これを働きたる日数に割合ひて分ければ、甲乙の所得各何程なるか」とりたてて難しい問題ではないが、出題内容はほとんどこのように実生活に根ざしたことが多い。「歩合算」の項目に次のような問題もある。

「1株の時價20・2圓の株を100株賣り、その代にて1株80圓の株を買へば幾株買ひ得るか」

いくつかの問題を解いてみたが、間違ひなく答えられた。わたしの算術頭も明治時代の十一歳並ではあったと、ひと安心した次第である。

浄土

2017/11月号 目次

連載	法然上人と親鸞聖人(十五)	林田康順	2
連載	江戸の川を歩く⑩	森 清鑑	8
連載	響流十方	袖山榮輝	16
連載小説	渡辺海旭⑧	前田和男	20
連載	マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	29
連載	誌上句会	選者＝無縫庵烏鷺坊	30
編集後記			32



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然上人 と 親鸞聖人

【連載十五】

親鸞聖人が捉えた
「浄土三部経」②

林田 康順

(大正大学教授)

『仏説観無量寿経』『真身観文』と『往生礼讃』『三尊礼』

前回、親鸞聖人は、『観無量寿経』の説示に基づく往生とは、阿弥陀仏の本願力を疑う自力の心をもった者が諸善万行を修める第十九願による往生であって、その結果として「第九・真身観文」所説の方便化身が住し、第三・地想観以下所説の方便化身土へ往生することとなると理解していたことを紹介しました。ちなみに私たち浄土宗に連なる者が、普段から拝読している「第九・真身観文」の中には、次のような阿弥陀仏のお姿が描かれます。

無量寿仏の身は、百千万億の夜摩天の閻浮檀金の色のごとし。仏身の高さ、六十万億那由他恒河沙由旬なり。眉間の白毫は右に旋つて婉轉せり、五須弥山のごとし。仏眼は四大海水のごとし、清白分明なり。身のもろもろの毛孔より光明を演出すること、須弥山のごとし。かの仏の円光は、百億三千大千世界のごとし。円光の中において、

百万億那由他恒河沙の化仏あり。一々の化仏に、また衆多無數の化菩薩けはさあつて、もつて侍者とせり。無量寿仏に八万四千の相あり。一々の相に、おのおの八万四千の随形好あり。一々の好に、また八万四千の光明あり。一々の光明、遍く十方世界を照らし、念仏の衆生を攝取して捨てたまわず。（浄土宗聖典一・三〇〇）

（試訳 阿弥陀仏のお身体は、夜摩天にある閻浮檀金より百万億倍も光り輝いています。その身長は、六十万億那由他恒河沙由旬という、とてつもない高さです。眉間の白毫は、毛が右回りに巻いていて、大きさは須弥山の五倍もあります。その御眼は、須弥山を取り囲む四つの大海のように広く、白い眼に青い瞳が際立っています。お身体の毛穴からは須弥山のような大きな光明が放たれています。阿弥陀仏が放つまどかな光明は、数え切れない程の世界を照らしています。そのまどかな光明の中には百万億那由他恒河沙もの化仏がおられ、その各々の化仏には数限りない化菩薩が脇で仕えておられます。阿弥陀仏の御姿には八万四千の目に見える特徴が具えられ、その各々の特徴にも八万四千の微細な特徴が具えられています。その各々の微細な特徴から八万四千の光明が放たれています。その各々の光明は、ありとあらゆる世界を照らし出して念仏を称える衆生を救い取り、決してお見捨てになることはありません。）

さらに、法然上人が弥陀化身として崇められた善導大師は、『観無量寿経』のこの説を受けて『往生礼讃』において「三尊礼（日中礼讃）」として次のようにお示しです。

弥陀身色如金山 相好光明照十方 唯有念仏蒙光摄（弥陀の身色は金山の如し。相好光明、十方を照らす。ただ念仏のみありて光摄を蒙る。）（浄全四・三七・二上）

（試訳 阿弥陀仏のお身体は金の山のようにです。阿弥陀仏が具えられる大小の特徴か

ら放たれる光明は、ありとあらゆる世界を照らし出して、ただひたすら念仏を称える衆生を救い取って下さるのです。

私たち浄土宗の教えに連なる者が日頃から慣れ親しんでいるこうした「真身観文」や「三尊礼」ですが、親鸞聖人は、こうした相好を具えられた阿弥陀仏、莊嚴が整えられた極楽浄土をどこまでも方便化身・方便化身土に過ぎないと規定するのです。

親鸞聖人書写『法然聖人御說法事』における講説の削除

親鸞聖人のこうした姿勢は、親鸞聖人ご自身が書写された、法然上人の遺文を集めた『西方指南抄』上巻本所収の『法然聖人御說法事』を通して顕著に知ることができます。『法然聖人御說法事』とは、やはり法然上人の遺文を集めた『漢語灯録』の第七巻・第八巻に収められている『逆修說法』の異本です。

そもそも『逆修說法』とは、建久五年（一一九四）頃、法然上人の門弟安樂房遵西の父であり、少外記しょうがいの職にあった中原師秀公に請われて初七日から六七日にわたる六会の導師として法然上人が説法された際の講義録です。法然上人は、この六会の説法に阿弥陀仏の功德を讃える仏功德讃歎と「浄土三部經」の説示内容を伝える仏經功德讃歎をそれぞれ配当し、さらにその仏經功德讃歎について、初七日・三七日・五七日は『無量壽經』『阿弥陀經』を、二七日・四七日・六七日は『觀無量壽經』を取り上げて説法を施されます。

このように『逆修說法』は、法然上人による説法の息吹を直接感じ取ることができる貴重な講義録なのです。ところが、親鸞聖人が書写された『法然聖人御說法事』では、「乃至」という形をとり、あるいは、そうした指示さえもないままに次のように説法が削除されて

います。（紙面の都合上、その詳細については、拙稿「法然上人『逆修說法』諸本の比較研究」〔印度学仏教学研究〕四五―二二、恵空書写漢語燈錄所収『逆修說法』について）〔仏教論叢〕四一」などを参照して下さい。）

初七日『無量寿経』『阿弥陀経』――『阿弥陀経』の説示を中心に一割程度削除

二七日『観無量寿経』――全文の中、八割程度削除

三七日『無量寿経』『阿弥陀経』――全文の中、一割程度削除

四七日『観無量寿経』――全文削除

五七日『無量寿経』『阿弥陀経』――全文の中、三割程度削除

六七日『観無量寿経』――阿弥陀仏・極楽浄土の様相を中心に四割程度削除

一見して分かるように、特に『観無量寿経』や阿弥陀仏・極楽浄土の様相を説示する部分が多く削除されていることが知られます。とりわけ、二七日では全文の約八割、四七日に至ってはなんと全文が削除されていることに驚かされます。

そもそも『西方指南抄』の成立に関しては、親鸞聖人ご自身が編集されたという説と、親鸞聖人は書写をされたに過ぎないという説があります。前者であれば、親鸞聖人は自己の思想信仰と異なる説示を意図的に削除したということになります。一方、仮に後者であったとしても、親鸞聖人は、『観無量寿経』の説示内容を削除するような教えを唱えていた仲間達と共に活動していたということになるのです。

法然上人と親鸞聖人の仏身論・仏土論の見極め①

私は、法然上人と親鸞聖人の仏身論・仏土論の根本的相違を多くの方々に納得していた

だく場合、大きく三点に絞ってお伝えすることになっています。その第一点が、ここで紹介した『法然聖人御説法事』に顕著に見られる法然上人の説示の大幅な削除です。

皆さん、ご自身の胸に手をあてて次のような状況を想定して下さい。皆さんも心から尊敬する先生、本当にお世話になった恩人がいらっしやるでしょう。そんな先生が遺された生前の講義録、恩人が周囲の方に投函されたお手紙が遺されていたとします。仮にそうした講義録やお手紙の中に、皆さんの考えと異なる内容が遺されていた場合、その該当部分を削除されるでしょうか。もしそうした状況になったとしても、「今はまだ自身の思いが先生や恩人の理解に追いついていないのであって、時が経てば私も先生や恩人の言葉を素直に受けとめられるようになるだろう」と思いを巡らすのではないのでしょうか。その先生や恩人を心から尊敬していれば、一方的な削除など考えられず、そうした振る舞いは先生や恩人に対する非礼とも言われるでしょう。ましてやそれが法然上人の御説法であればなおさらです。『選択集』撰述にあたって法然上人は、善導大師『観経疏』の次の一節を引用されます。

この義すでに証を請うて定め竟んぬ。一句一字、加減すべからず。写さんと欲する者は、もつばら経法のごとくせよ。まさに知るべし。

（試訳）本書の説示内容は、阿弥陀仏による証明をいただいて定めたものです。ですから、一句一字たりとも加えたり減らしたりしてはいけません。書き写そうとする者は經典のように扱うべきです。以上のことを知らねばなりません。）

この一節を提示することによって法然上人は、「浄土三部経」と『観経疏』に開示される釈尊や弥陀化身善導の意図を正しく汲み取った『選択集』の説示内容も一句一字たりと

も加減してはいけないと暗に訴えておられるようです。

なるほど、私たち浄土宗の教えに連なる者にとつて、法然上人のご遺文は仏説のごとく、一字一句加減することなく尊くいただくべきものです。それにもかかわらず親鸞聖人は、こうした行為をされたのです。それもこれも親鸞聖人が、『観無量寿経』に説示される阿弥陀仏や極楽浄土を方便化身・方便化身土と受けとめたからに他なりません。

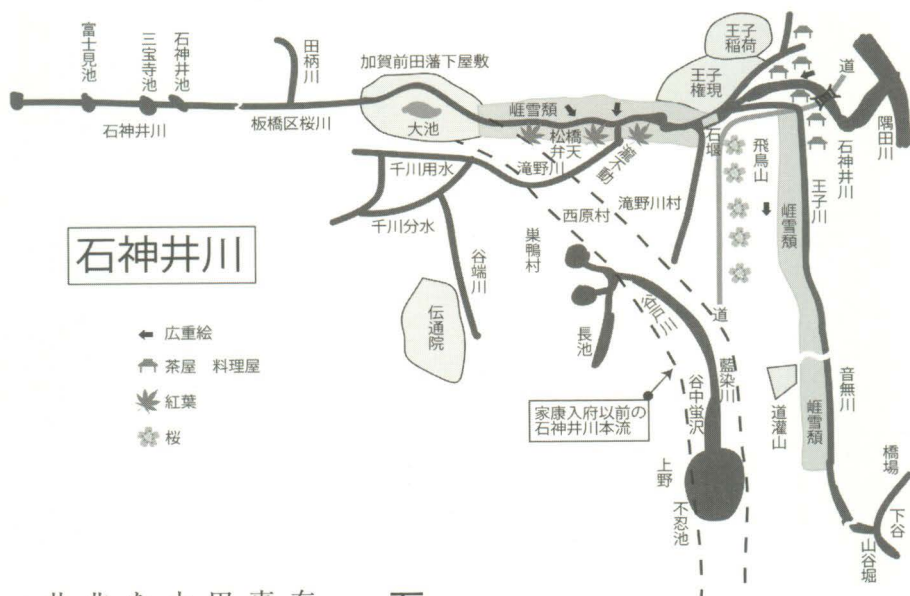
今。幸いなことに私達は、親鸞聖人が書写した『法然聖人御説法事』の異本である『逆修説法』を手に取り、建久五年頃の法然上人が『観無量寿経』をいかに受けとめ、阿弥陀仏や極楽浄土の様相をいかに語っておられたのかについて学ぶことができました。それこそ、親鸞聖人とは異なる流れを継承し、法然上人のお言葉を何よりも尊んで、何とかして後の世にこの御説法を伝え遺そうと尽力していただいた先徳方の努力の賜なのです。（続く）

江戸の川
を歩く

第十六回

江戸ウォーカ―

森
清鑑



石神井川

石神井川は、武蔵野の原野、小金井村に端を発し（現在の小金井カントリークラブあたり）、田畑を縫って東へと流れる（小金井公園の北端、石神井川上流端）。田無を突っ切り、青梅街道を渡り、東伏見を通り、富士見池の湧水を加え、練馬村に入る。蛇行を繰り返しながら石神井村まで来ると、三宝寺の南に出る。その北側にある大きな湧水池、三宝寺池と石神井池（石神井公園）からの流れが加わり、川幅は、一段と広がる。

三宝寺池の南端には、石神井城（石神井一帯を治めていた豊島氏の居城）があった。その後も、田畑を縫うように蛇行し、水を供給し、下練馬村から上板橋村を通る。ここで北から田柄川が加わる。下板橋村に出ると、広大な前田加賀守下屋敷に入る。そこからの湧水も加え、滝野川村、王子村、飛鳥山の北端から、東へ進み、近くを蛇行して流れる荒川（隅田川）に合流している。

嵯雪類がけながれ

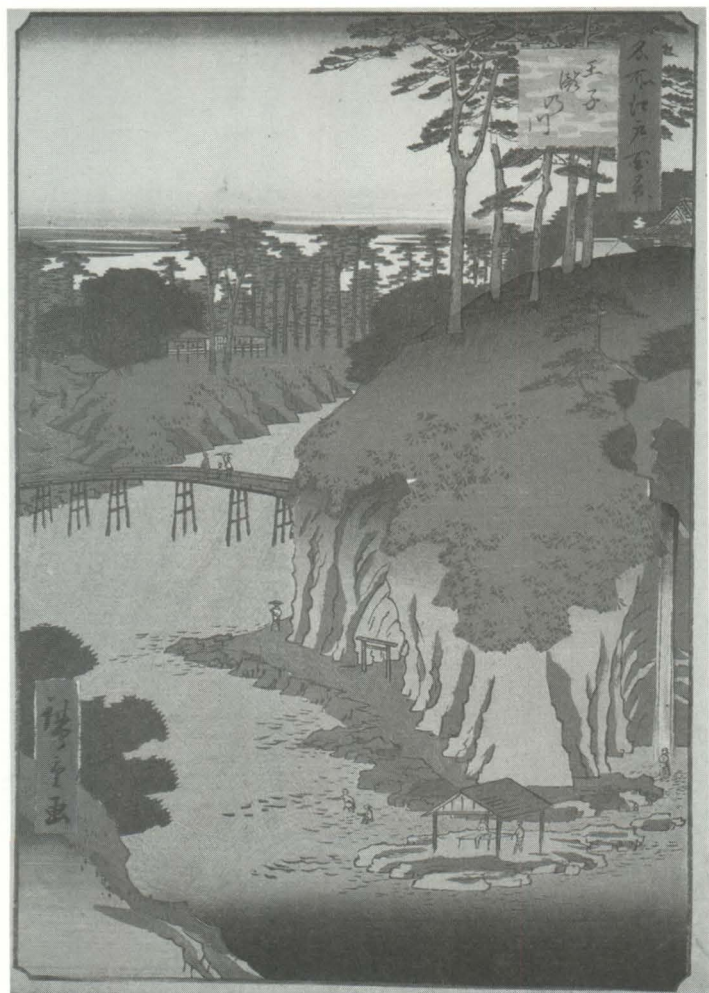
石神井川は、加賀藩前田の下屋敷を出ると、これまでの田畑を縫ってきた、穏やかな流れと様相は一変し、猛々しい崖下谷底を流れることになる。辺りは溪谷の観。ここからは、江戸の地図に記入されている、いわゆる嵯雪類が流れの両側、連綿と続く。この嵯雪類は、滝野川村に沿って続き、飛鳥山の北端をぐるりと回って、飛鳥山の東端を舐め、それから延々、田端村、道灌山まで南に続いている。嵯雪類は、海水浸食時代の海沿いの崖の名残。すなわち、太古の昔、ここまで海水が押し寄せていたのである。今日、嵯雪類は見る影

もなく、急斜面を蛇行して下る坂道の跡と化している。それも部分的に痕跡を留めているに過ぎない。

下屋敷を出て、流れを進めると、すぐに左岸に子安観音寿福寺の屋根を拝す。さらに、ちよつと行くと右手に松橋弁天の祠が見えてくる。ここには自然の神秘が宿っている。滝に打たれ行を積む人や洞窟の入り口に立つ鳥居。その前には、州があり、屋根付きの休憩所が建っている。広重は嵯雪類を強調し、ここを描く。滝の上に、松橋院金剛寺の黄金色の屋根が映える。紅葉の季節にはモミジの赤一色に染まる。通称「紅葉寺」。

さらに行くと、右側に不動の滝が現れる。広重はこの神秘の様も描く。太い滝が落ち、滝壺で涼を取る人もいる。手前の州では、縁台に腰掛けて一杯やる人の姿も見える。石神井川のこの辺りの南側は、滝野川村なので、処の人々は、この流れを滝野川と呼んだ。

やがて左岸に王子権現社の社が見えてくる。平安時代末に熊野の莊園領主であった豊島氏が若一王子を勧請して当地に建立したもの。そこには音無川が流れていたのも、この辺りを音無川と名付けた。王子権現の北側が王子稻荷。広重は、大晦日に関八州の狐が参集



◆ 広重「王子滝野川」松橋弁天

する伝説を描いている。いわゆる王子の狐である。

この辺り、権現様の境内が間に割り込み、川筋が幾つにも別れ、石堰が設けられている。江戸っ子の水遊び場。

江戸から二里の遊興の地。王子権現のお参りも兼ねて観光客が押し寄せることになった。次第に周辺の川縁には、料理屋、茶屋が集中するようになり、大盛況。

飛鳥山遊興の地

この溪谷美を見下ろす飛鳥山は、江戸の人々を魅惑し、江戸近郊の最大の観光地と化す。とりわけ飛鳥山には、八代將軍吉宗が数千本の桜を植えたこともあって、花見の名所となる。古典落語の「花見の仇討ち」の舞台。ここでは上野寛永寺の花見と異なり、人々は、自由に飲み食いして、桜を愛でることができた。眼下に溪谷を見下ろし、北遠方には筑波山、南に富士山が聳えている。

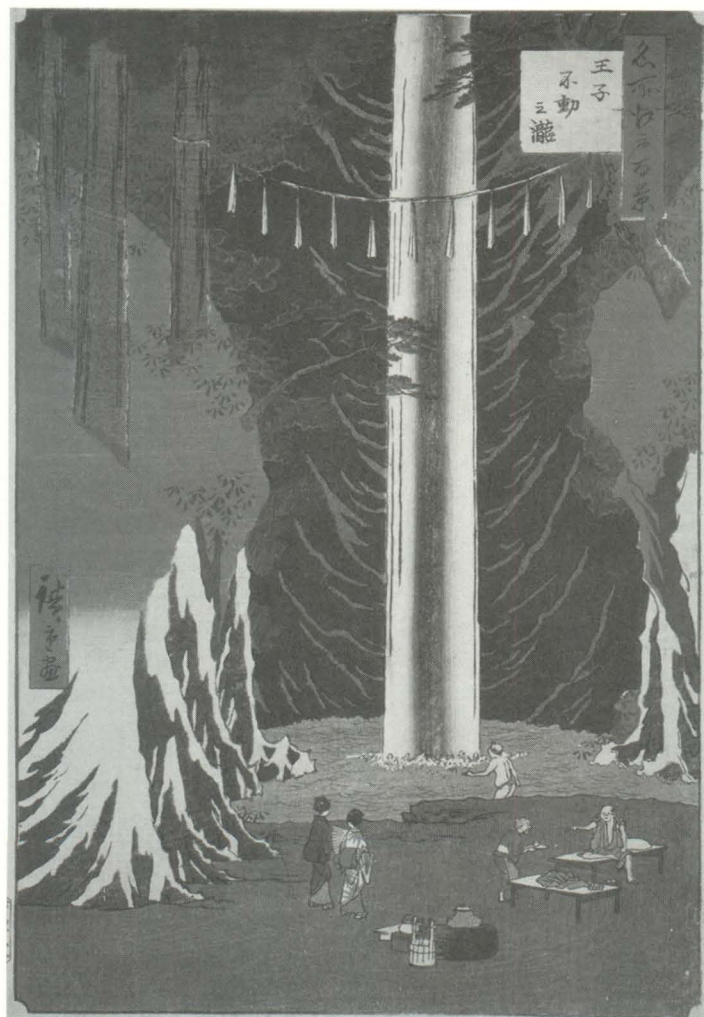
石神井川本流は、この飛鳥山の北端を巡って北へ蛇行し、王子村を抜けて荒川（隅田川）に流れ込んでいく。

谷戸川など

江戸時代、飛鳥山台地西側一帯の田園には、幾筋もの流れがあった。石神井川石堰辺りから滝野川村へと南に下る川筋。これは田畑の中で消えている。前田下屋敷に沿って、西から流れ、南に下り、再び北上して石神井川へと向かう千川用水。多数の川筋を集め、南に流れる千川支流。その一本が南に下り、谷端川と呼ばれるようになって、伝通院の脇を通り、最後は、水戸後楽園に流れ込む。

そして巢鴨村御葉園側にあった長池（現在の染井霊園側）を水源とする谷戸川。近くには、幾つもの湧水池があり、湧き出た水が一本化されて流れている。この川は、田端村、駒込村を通り、谷中では蜚の名所、蜚沢の景観を生み出し、藍染川と呼ばれるようになり、最後は、上野不忍池に流れ込んでいく。

もうひとつ、石神井川の分流として、飛鳥山東側の峠雪願下に沿って、南に流れる川がある。これが王子川。この川は、田端村に入ると音無川と呼ばれ、上野の東叡山寛永寺から東に転じ、新堀村、金杉村、根岸



◆広重 不動の滝

の里を巡り、さらに下谷で二手に分かれ、一つは橋場町を通って、大川へ行く（思川）。他の一つは、吉原日本堤に沿って流れ、今戸から山谷堀を経て大川に流れ込んでいる。以上のように、この辺りには幾筋もの流れがあり、江戸でも有数の田畑を造成し、潤していたのである。

石神井川本来の流れ

家康の江戸入府時には、石神井川本流の流れは、どうだったであろうか。おそらく、本流は、前田下屋敷の処で帷雪頼に阻まれ、沿って南に下り、谷戸川のルートを辿って、上野の不忍池を造り、神田川泉橋辺りをさらに下り、お玉が池を抜け、日本橋小舟町辺りで直接江戸湾に注いでいたと思われる。最近まであった東西の掘留川は、その河口の名残。すなわち、こここそが石神井川が江戸湾に流れ込む現場であったと思われる。

そこは家康江戸入府時、「のどちんこ」のように海に突き出た江戸前島の東側北端に位置している。この流れでは、石神井川は、大雨の度に、大洪水をもたら

◆広重 東都名所飛鳥山下春の図 女性が水遊び。茶屋、料理屋が並ぶ



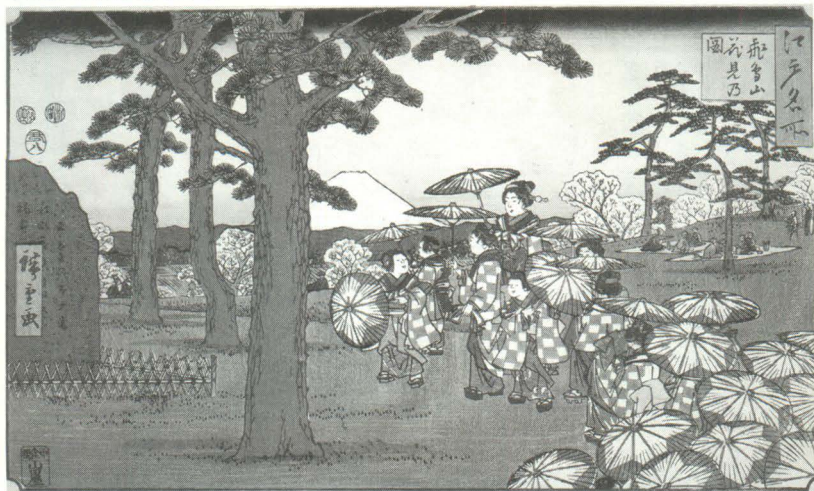
していたはずで、家康は、大都市江戸を目指して、幾度も石神井川瀬替え工事により、領土と農地の確保を目指した。本流を飛鳥山の北端から隅田川に向かわせ、下流では神田川を掘削し、隅田川に流し、河口では日本橋川を掘削して同じく大川へ。こうしてみると石神井川の変遷は、家康の江戸造りの重要な柱であったと思われる。石神井川はもう一つの「江戸の母なる川」であった。

【参考文献】

「江戸、東京の川と水辺の事典」

鈴木理生

◆広重「飛鳥山花見の図」



こうるじっぽう
響流十方

もし我れ佛を得たらんに、国中の人天にんでん、宿命しゆくみようを識しらず下しも、
百千億那由他諸劫ひやくせんのかんねたしよごうの事を知ざるに至らば、正覚を取らじ。

【無量寿經】卷上

私が仏となる以上、「私の」国土に住む人々や天人が、過去世を知ることがなく、
少なくとも百千億那由他諸劫もの「永い過去世の」出来事について知ることが、「万
が一にも」できないようであるならば、「その間、」私は仏となるわけにはいかな
い。(第五宿命智通願) (浄土宗総合研究所編『現代語訳 浄土三部経』より)

懐かしいのが嬉しくて

先般、天台宗総合研究センターの面々が私の勤める浄土宗総合研究所を訪れた。いろいろ尋ねたいことがあるという。こちらの研究員が代わる代わる説明し、質疑応答に当たった。私はご挨拶要員であつたが終始、立ち会つた。各教団の附属研究所同士、こうした交流がたまにある。今回は、時間が経つにつれ互いに打ち解け、それぞれの悩みを理解し合うなど、いい機会となつた。

予定の時間が訪れ、先方がお暇の挨拶とともに席を立つた。その時、私にとって思いがけない出来事が起きた。天台宗側のなかでもベテランらしき研究員が私に近寄り、こう尋ねたのである。

「失礼ですが、袖山さんは昭和三十八年生まれではないですか」

まさにその通りなのだが、唐突な質問に私はキョトンとした。すると矢継ぎ早に、こう言つた。「オレ、Kだよ」

その瞬間に、三十数年前の日々が蘇つた。そうだ、僕らは同級生だつたんだ。僧侶養成の機能を備えた大正大学は浄土宗、真言宗智山派、同じく豊山派、そして天台宗の三宗四派が設立母体である。当時、大正大学では埼玉県の松伏町に埼玉キャンパスを構え、一年次の学生はみな埼玉で学ぶことになっていた。そのなか、僧侶を目指す学生にはキャンパス内での寮生活が課せられていた。

寮の名は道心寮。鉄筋四階建てながら宗派ごとに畳敷きの勤行室があり、頭を丸めた学生が朝に夕に法衣をまとい読経や作法の修練に励んだ。多少なりとも僧堂生活を体験させようというのだ。

埼玉キャンパスは、とある女子大の校舎と敷地であつたものを転用したと聞いている。道心寮も、もともと女子大の寮であつたという。その建物に三宗四派に属する若き男僧九十余名が、先輩も後輩もないまま、「せーの」で一年間、四人一部屋で寮生活を過ごした。K君も私もそのなかの一人。属する宗派も、過ごした階も違う二人に濃厚な付き合いはなかつたけれども、同じ道を進み始めた私たちそれぞれの青春があつた寮の、あの一年間に、確かにあつた。

「Kだよ」と言われた瞬間、今の姿形はともかく、脳裏に三十数年前のK君の面影が蘇り、今と昔がつながつた。当時、部屋着代わりだつたジャージ姿や仕事まで思い出せた。

「あつ、そうだよ。K君だよ。ごめん、言われるまで気付かなかつたよ」

「いや、お前苗字変わったし、そうかなと思ひながらも確信持てなくてさ」

懐かしくって嬉しくなつて、お互い破顔になりながら肩を叩き合つた。そして、お互いが知っている同級生情報を交換した。濃厚な付き合ひではなかつた

のに、別れが名残惜しかった。忘れたままでも痛くも痒くもない過去であるはずなのに、思い出してみたら、懐かしくって嬉しくなる。チーズやワインのように時間をかけて熟成され、味わい深くなるのが過去なのかもしれない。

ところで極楽浄土に往生した人には、さまざまな能力が具わるといふ。たとえば過去のことを思い出す能力。極楽に往生する前の人生のことも、もう一つ前の人生のことも、遙か遠い過去にまでさかのぼる生き死にの繰り返し総てを思い出せるという。あるいはまた、他人の心の中を知ることができるという。

極楽浄土では、自分のことはもちろん、誰がどういふ過去を背負ってきたのか、お互いのことを熟知し、遙か遠い過去の御縁を確かめ合っては懐かしく思つて喜び合い、「袖振り合うも他生の縁」を味わい堪能するのである。

K君との再会は、ほんの数分の立ち話であつた。でも懐かしいことが嬉しいことで、それがまた幸せなことなのだといふ気がしてくる。そうなのだ。極楽浄土には、そうした幸せがいふも満ち溢れているのだ。

(袖山榮輝)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第八十二回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

いざ、シベリア鉄道で懐かしの故国へ①



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校（現芝中・高校）、同本校（現・大正大）へ進学を許され、明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担い、印度学の拠点ドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍らキリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、パーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、仏教に造詣が深いオーストリアハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ伯と出会う。また、ヨーロッパ初の比丘ニャーナティロカ存在を知らされ強い興味を覚える。一方盟友・荻原雲来が博士号を取得して帰国、一人異郷に残された海旭は母トナ逝去の悲報に耐えながら、気鋭の仏教学者ヴァレザールと出合い龍樹の『中論』の独語訳を手伝うことで学究に弾みがつき博士号を取得。しかし導きの師・端山海定逝去の報に海旭の帰心は薄れ、宗門からの給付金も打ち切られる。そこで畏友の東大教授・姉崎正治の仲介で富豪カーンに援助を求めるも断られ万策尽きたところへ、ドイツ駐劄日本大使の珍田捨巳から突然呼び出しがかかる。海旭は悩んだ末に相思のドイツ女性の勧めを受け入れ、帰国を決意する。

珍田捨巳邸を再訪

ストラスブルクでX嬢と「永遠の別離の晩餐」をすませた渡辺海旭は、自慢のリーゼントを剃り上げると、翌朝一番の列車に飛び乗り、夕刻前にはベルリン郊外にあるドイツ駐劄日本大使・珍田捨巳の私邸に到着、青銅製の呼び鈴を鳴らした。前回ここを訪れたときのフロックコートに革靴という出で立ちは、質素な薄墨の法衣と草履に変わっていた。

玄関口に姿を見せた大使閣下は、海旭を見るなり、一瞬にしてすべてを察したようだった。「渡辺君、君の決断のほどは、その恰好をみれば十分にわかった。まあ、上がりたまえ」と海旭を応接間へと導いた。

珍田は海旭に向かっていきなり威儀を正すと、「渡辺君、君にはなんともつらい決断をさせた。そして君のご婦人にも」と言っ

て、深々と頭を下げた。

の完全撤廃のため赴任してきた子爵閣下が無冠の留学僧にここまで身を低くするとは……。海旭は大いに恐縮すると共に、大いなる疑念を抱かずにはいらなかった。昨晚、X嬢は、海旭に帰国を促すのは「自分だけの決断」と言い切ったが、ひょっとして珍田が裏で手を回してそう言わせたのかもしれない、場合によつては「女には女」ということで、妻の岩が事前に説得役を買って出たのではないか。だが、そんな夫唱婦隨の「間諜作戦」はいくらなんでも俗っぽすぎると、あわてて打ち消したが、もう一人の海旭の脳裏には、仮にそうだとしたら、一体何のために珍田はそこまでやるのかという根源的な疑念が消えずに残り続けた。

大使は夫人にビールをもつてこさせて、海旭へ勧めると、海旭はあわてて手をふって、「さ、酒は一切やめました。故国に戻るからには福田行誠師にならって戒律を貫きます」と盃を押し戻した。

珍田は「断酒だけでなく生涯無妻を貫くということかね」といって大きくうなずくと、酒の代わりに緑茶をもってこさせ、「いやいや、そこまでの決意とは、おそれいった。では、今後のことを相談しよう」と切り出した。「さて、まずは君が留学中にこしらえた借金だが、それは心配しなくていい。私のほうで清算をさせてもらう」珍田は海旭に言葉を差し挟ませずに、続けた。

「それにしても、貧乏僧侶にしてはよくぞここまで借財をしたものだ。どうやら君は、坊主というより、困った人を見るとほうつてはおけない俠客の性分らしい」

海旭が気鋭の仏教学者ヴァレサーのカネの無心に応じたことも、ツァーリに止めを刺す好機到来と帰国をはやる亡命中のロシア社会革命党員にカンパを惜しまなかったことも、どうやら調べがついているらしい。

二年ほど前、姉崎を仲介者にしてフランスの世界的大富豪のアルベール・カーンに返済

条件付きで借金を申し込んだのは、貧乏学者や亡命革命家への支援に加えて、宗門からの仕送りが打ち切られたことによる日常生活費が積もりにつもって、それを解消しなければ帰国したくても帰国できない窮地に陥ってしまったからだった。

それにしても、借金の詳細についてカーンにも姉崎にもあかしていなかったのに、珍田には把握されているらしい。すべてがお見通しで、またまた海旭の頭に「間諜」という言葉がよぎった。

珍田の海旭に対する「侠客坊主」という指摘は、まさに凶星で、海旭のその後を見事に言い当てていた。帰国後、住職に復した深川西光寺には、イギリス人総督の爆殺を企ててインドから亡命してきたラス・ビハリ・ボースをはじめ、多くのアジアの革命家を匿い、また日本で一番の高給取りの中学校長といわれながら、死後財布が空だったのは、親の稼業が傾くなどで勉強を続けられなくなった苦

学生のために使い果たされたからだった。まさに海旭の生涯は「侠客坊主」の一生であった。
珍田大使は単なる仲介者にあらず!?

珍田は、酒を断った海旭を氣遣ってか、独酌で日本酒を猪口に注いで喉を湿してから、海旭に急いで帰国を促す理由を説明しはじめた。それは、その後の海旭の人生を決する重要な示唆となるのだが、その珍田の言説にはこれまで以上に筆者の憶測が働いているので、ここで中断によって興を殺ぐことをお許し願って、わが憶測の前提と根拠を開陳し、読者諸賢のご理解を賜りたいと思う。

まずは海旭が書き残した日記などをベースに、海旭と珍田の相関を時間に従って整理すると以下のとおりである。

海旭は、ドイツ留学七年目の明治四十年十月、三年以内に学を修めて帰国せよという宗門の条件に遅れること四年で博士号を取得。本来なら、同期の萩原雲来と同じく即帰国し

なければならぬところだが、師事するロイマン教授から与えられた研究の継続などを理由に延長を願い出るも、宗門は「仕送り」を打ち切る。宗門からすると「兵糧攻め」にすれば帰国すると考えての措置であったと思われる。しかし、当地にとどまった海旭は当然にも手元不如意となり、翌四十一年初春、畏友の姉崎正治の仲介で富豪カーンに援助を求めるも断られる。それでも、窮乏生活にたえながら、約一年半の間、ロイマン教授の「共同研究者」として多くの論文に従事。おそろくロイマンもこのまま後継者として残ってくれるものと内心で期待、いつばう宗門も海旭の帰国は半ばあきらめ、さらに海旭本人もX嬢との出会いがありドイツで大乗仏教を布教しつつ研究を続けようと覚悟を決めかけたところであった。

そこへ明治四十一年十月五日、珍田捨巳がドイツ駐劄日本大使として着任。そして海旭は、その一年半後の明治四十三年三月に帰国

する。この一年半に珍田と海旭との間に何があったのか？ 両者の関係にどのような推理が成り立つのか？

筆者には、珍田が宗門に頼まれ、たまたまドイツにいたので口をきいてやったという受動的な偶然的産物とはとても思えない。むしろ宗門からの依頼を「奇貨」として、珍田は主体的に動いたのではないか？

それは海旭の帰国後の去就からも明らかのように思われてならない。

海旭は、明治四十三年三月に帰国すると、宗教大学（現在の大正大学）、東洋大学の教授に就任、宗門の機関紙「浄土教報」の主筆に復すると共に、同年の法然上人七百年遠忌事業に関わり、その目玉である細民救済のセツルメント活動に着手、翌年それは「浄土宗労働共済会」と改称される。

どうみても、宗門と珍田の間にはあらかじめよく練られた「戦略的着地」があり、たまたま知り合いから聞き分けのない、やんちゃ

坊主」の説諭を頼まれて従わせたというような場当たり的な対処ではない。しかもそのイニシアティブは宗門ではなくむしろ珍田にあったと筆者には思えてならない。

なんとすれば、筆者の見るところ、珍田という人物が以下のごとく、日本が列強に伍していくために知略をつくした戦略的交渉人であつたからだ。

知略と戦略のタフネゴシエーター

海旭が浄土本校で学んでいた当時、珍田捨巳は、同校の英語講師をしながら外務省の端役人に甘んじていたが、明治二十三年に米國サンフランシスコ領事に登用され、晴れて外交官としての第一歩を踏み出す。以後、韓国領事、清国領事、ブラジル弁理公使、オランダ公使、ロシア公使を歴任。明治三十六年には、桂太郎内閣の外務次官に就任、小村寿太郎外相の片腕として、難航をきわめた日露戦争後の講和条約交渉の処理にあたり、その功

勞により明治四十年、男爵に任じられ、翌四十一年、海旭が留学中のドイツへ大使として赴任する。

海旭が成果を知るのは帰国後のことだが、珍田はドイツでは、幕末に列強と結ばれた不平等条約のうちいまだ成し遂げられていなかった「関税自主権の回復」に取り組み、三年をかけた粘り強い交渉の末に悲願の対等条約の総仕上げに成功する。その功績により子爵に陞爵され駐米全權公使に栄転。そこでは社会問題化しつつあった「排日運動」に直面、今も日米親善のシンボリックイベントとして語り継がれているワシントンはボトマック河畔に桜を植樹するなど日米の文化交流を推し進めるなかで問題の鎮静化につとめる。

さらに大正九年、第一次世界大戦後のパリ講和条約会議に日本全權の一人として参加。ドイツの山東利権の処理などをめぐる列強との意見対立を、持前の粘り強い交渉力で乗り切って、「霞ヶ関一の切れ者」の異名を奉られ、

ついに伯爵の位にまでのぼりつめる。

その後、外務省を退官してからも珍田の活躍は留まることがない。大正十年、皇太子の欧州訪問に供奉長として同伴、五年後の大正十五年十二月二十五日、大正天皇崩御をうけて即位した昭和天皇の侍従長に就任するのである。

これほどの知略の人物が、たまたまアルバイトで英語教師を引き受けたときの元生徒というだけで、果してその男のために仲介の労をとるだろうか？ また、珍田はアメリカ留学中に洗礼を受け牧師の資格までもつ。そんな敬虔なキリスト者が、異教の宗派の依頼にひと肌脱げるものだろうか？

おそらくはドイツ大使に赴任する前、日本の本省勤務の折りに、宗門から昔教師をしていたよしみで仲介を頼まれたと思われるが、当初はそんな「些事」にかまけていない場合ではないと断るつもりでいたのではないか。しかし、断るために海旭のことを調べるうちに、

この留学僧は珍田が生涯を捧げようとした日本にとつて、大いに使える器」と思い直したのではないだろうか。

普段は温厚・朴訥な珍田だが、一端、決断をしたら妥協なく成果を上げるまで猛進する。パリ講和条約交渉時の部下で後に日独伊軍事同盟の締結者となる松岡洋右は、そんな珍田をこう評している。

「競馬場に引張って連れ出すまでにはじつに骨の折れる馬であるが、ひとたび馬首を立て、スタートを切ると、じつによく走る馬である」
おそらくそんな珍田の「本性」作が海旭の帰国工作にあたっても発揮されたのではないか。

長くなったが、以上が「渡辺海旭帰国劇」のシナリオ・ライター兼演出家は実は珍田捨てではないかという私の憶測の根拠である。

「大アジア主義者・海旭」の原点

さて、お待たせをした。それでは珍田が「主

体的仕掛人」であるという筆者の推測にもとづいて、話を再開し先へ進めるとしよう。

珍田は、日本酒をぐびりと干すと、まずは海旭に宗門の意向をこう伝えた。

「宗門が君に期待していることが二つある。一つは百年に一度の法然上人七百年遠忌事業が一年後に控えているが、これに渡辺君の舶来新知識を大いに役立ててもらいたい」珍田はそこで一息入れると続けた。「それから、かつて私が英語を教えていた君の母校が国の認可を受けて一般の師弟も学べる中学校になった。今荻原雲来君が校長をつとめているが、学究肌の雲来君にはどうも任が重すぎるので、それも渡辺君に引き受けてほしいと」海旭にとって芝中学の校長を引き継ぐ件は、大いに興味と挑戦心をそそられ否やなかった。問題は法然上人七百年遠忌事業だった。考えてもみなかったことなのでこれといったアイデアはなかった。と、珍田からヒントが投げられた。

「ところで渡辺君、法然上人七百年遠忌事業だが、かねて君が関心をもっていてドイツでも何か所も視察をした救貧事業、セツルメントを目玉にしてみてもどうかね」

仏教界初のセツルメント活動となる「浄土宗労働共済会」は、どう考えても宗門の要路の発想から生まれたものではない。今なお海旭が留学中に温めていたアイデアを帰国して具現化したと考えられているが、筆者の妄想的推理をお許しただけならば、珍田がそもその生みの親ということになる。

珍田としてはこんな戦略的企図を海旭に託したかったのではないか。

「国を富ませる一方で、それによって生み出される貧窮細民を救済せねば国の基がくずれる。日本が列強に伍していくためにも社会的な事業は絶対に欠かせない。しかし、これは諸刃の剣でもある。宗教家がそれを行なえば、困窮者を救って国の基は安定するが、社会主義者に委ねると、国に不満をいだく困窮者を

あおることになるからだ」

さらにもう一つ、戦略家珍田が海旭の帰国工作にあたつて仕掛けた興味深いものがある。それは「大アジア主義」であり、珍田はそのために別れ際に海旭にこんな言葉を囁いたのではないかと筆者は妄想を逞しくしている。

「重ねていうが君の借金をふくめてカネの心配はいらん。ついては頼みがある。シベリア鉄道に乗り、ハルビンで途中下車、ぜひ北条大洋にあつてほしい。君とは旧知らしいね」

この珍田の「頼み」のどこが「大アジア主義」につながるのか？

北条大洋とは海旭が留学前に参加した宗派を超えた若手の勉強会「経緯会」のメンバーだが、実は外務省の現地要員として満蒙の地で長らく情報収集と工作活動にあたっている「課報員」であり、そのことを海旭は知らないでいた。さらには、この時点では海旭自身知るよしもなかったが、やがて自らが「大アジア主義」を唱える国家主義者の頭山満らと昵懇

になり、死の直前には満州国境泊湖畔に設立された学校の初代総長に就任。それは「大亜細亜主義を抱懐する青年を陶冶鍛錬し満州建国の理想成就に献身すべき模範的人材を養成する」ための実践的学校で、まさに海旭は「大アジア主義者」として人生を終えたともいえる。そんな海旭の原点の一つがここにあったのではないかと筆者はいっそう妄想をつのらせるのだが、果してそれが文字通りの妄想なのか、それとも海旭の実像を豊かにあぶりだすものとなるかは、次号のお楽しみとしよう。

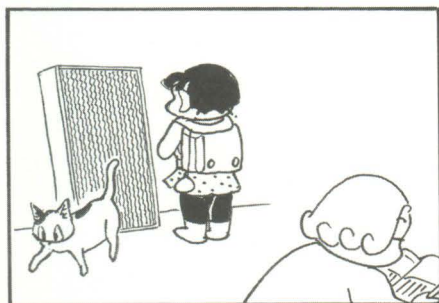
(つづく)

145

かい目

さっちゃんねネッ

かまちのひろ



浄土誌上句会

●土

〈特選〉

白日傘風土記の丘へふたつみつ

河本 直樹

風土記は奈良時代初期、元明天皇の詔によつて全国各地で編纂された。出雲・播磨・常陸な

どが特に有名。その地の記念館を風土記の丘として保全している。そこへ白日傘が登っていく。

歴史好きな女性の知的な横顔が見える。

〈佳作〉 吾もあの土に還らむ大西日

横尾 光江

南吹く土葬の村の村外れ

水島 彩子

薄くともわれは土用の鰻なり

加来 義久

●用

〈特選〉

野暮用のありて海月となりにけり

富島 英吾

野暮用とは野暮な用事。つまり粹ではない

ことを指すが、いまでは、行先を言いたくないので、軽くごまかすときに使われるようだ。ちと野暮用で、と席を外した男。怪しいその態度がクラゲのように透けて消える。

選者 = 無縫庵烏鷺坊

〔佳作〕御用御用とめまとひの岡つ引き

三尺寝枕は用語辞典箱

お盆にはお導師用の蒸しタオル

本宮あまり

近藤 英正

樋口 黎明

●自由題

〔特選〕

秋灯し喪服を畳む幕の裏

今西由香利

不祝儀なのに、なにか慌ただしく、なにか
甘やかである。たった一枚の幕が境界となつ
て別次元にある。たとえば幕のこちら側では
通夜の酒を酌み交わしているのに幕の向うで
は着替えをする。秋の灯の薄明りが効いている。

〔佳作〕地下を裂くサックス全都台風裡

矢島 宗一

蠅叩きここにあつたか百円め

西嶋 理恵

紺青を噛めば小茄子のきゅつと鳴く

遠山征二郎

浄土誌上句会
のお知らせ
兼題

久保 自由題

締切・二〇一七年十二月二十五日 発表・『浄土』二〇一八年二・三月号

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。 ●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内月刊『浄土』誌上句会係

編集後記

冬立つや月の姿をなつかしむ 岱潤

今年の一月得度式をして、また一人お

弟子が出来た。西洋哲学を学んできた在家の子で、とにかくお坊さんになりたいという信念が強く、僧名を授けたら、すぐに裁判所に行つて戸籍名まで替えてしまった。その彼が教師養成講座の第一期を京都清浄華院で終行した。すると東京近辺のいっしょに修行したお仲間と呼ばひかけ、月一回の勉強会を寺で開くことになった。その勉強会を見学させて頂くと、読む偈の違ひはともかくとして、入堂の仕方、維那の大鑿の打ち方、導師の作法などあまりの違ひに驚き、法要終了後話

をすると、一同「京都ではそのように習った」と、声をそろえて言うのにはなお驚いてしまった。

もう三十年も前だが、以前の弟子も京都の道場だったがそんな話は聞いたことがなかった。何故今東西で法式にこれほどまでに違ひを打ち出すのか、理解に苦しむ。彼らは次からは鎌倉の光明寺、そして増上寺と東が続く。もう関西式は忘れた方がいいんじゃないか思つたりもしてしまつた。浄土宗は東西分裂が解消されてからも六十年以上になる。もうそろそろ法式を統一させてもいいのではないだろうか。

彼が入行すると、指導員の方が彼に僧

侶の目的とは？と質問してきた。彼が「念仏の教を弘めること」と応えると、指導員は「僧侶の目的は悟ることだ」と言つたそう。指導員にも問題はないだろう。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十三巻十一月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十九年十月二十日

発行 平成二十九年十一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了悟

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
藤谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田紘義(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森厳寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない
※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

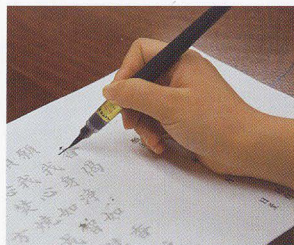
《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

浄土宗の日常勤行式が
写経になった!! 写経後は
オリジナルの経本
にもなります。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の
皆様へ

写詠歌 セット

宗歌「月かげ」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう!

当会オリジナル新商品!!

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。